福山市福寿会館

和洋折衷様式に美しさ

JR福山駅から北に300メートル。福山城公園の北東の一角に、急勾配の屋根が印象的な木造2階建ての洋館があります。福山市福寿会館です。

福寿会館は檜皮葺唐破風の表玄関をもつ和風の本館に、この洋館が付随している和洋折衷様式の建物。洋館部分は、1997年7月15日、松永町にある「日本はきもの博物館コーヒーハウス」に次いで、市内で2番目の国の登録有形文化財となりました。

この洋館で目をひくのは、玄関と妻壁の装飾の美しさです。

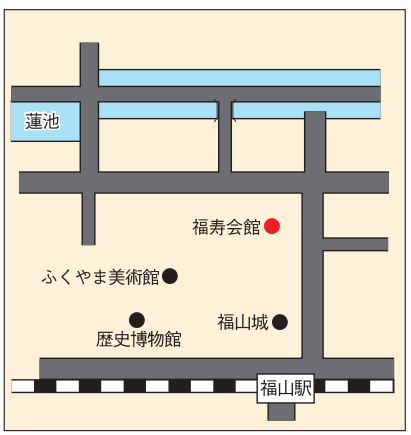
福寿会館洋館

北側の正面玄関は半円のポーチとなっており、玄関を支える2本の円柱の頭部には舌文様の浮き彫り、弧状に突き出した庇には渦巻き文様がみられます。また庭に面した南側の妻部分には、装飾柱のつけられた二つの窓があり、その上にベネチアルネサンス風のアーチ形の美しい飾りが、中央部には楕円形をデザインした浮き彫り装飾が施されているのが特徴です。

この建物は、サバなどを原料とした削り節の製法を明治時代に考案し、機械化によって、削り節の大量製造、販売に成功、福山を削り節の先進地とした安部和助さんが昭和初期に別荘として建てたものです。

福山空襲により、市街地の8割を焼失しましたが、「福寿会館」は奇跡的に戦禍をまぬがれたのです。

本館の表玄関



戦後、この建物の所有者となった名誉市民の澁谷昇さんが、1953年福山市に寄贈され、「福寿会館」と名付けられました。当時、市は結婚式場として一般に開放、本館の蔵を式場とし、本館や洋館で披露宴を行ったという思い出をもつ市民も多いことでしょう。また洋館は友好都市カナダのハミルトン市をはじめとして外国の賓客の応接にも使われ、国際親善の役割も果たしてきたのです。

現在、本館はお茶会や研修会などの会場に、洋館は喫茶室として使用されています。

（1999年1月号に掲載）

実相寺本堂・山門

神辺城から移築された山門

福山の市街地から旧石州道を通って北に向かうと、藪路（旧大峠）の坂の南側に、法鏡山実相寺があります。この寺は、寛永10年（1633年）の創建と伝えられる日蓮宗の寺院で、「福山志料」によると、水野家の家老上田玄蕃の菩提寺であったことが記されています。

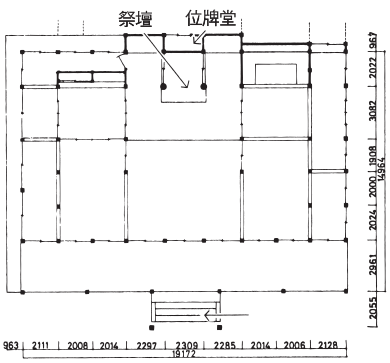
▲実相寺本堂

▼実相寺山門

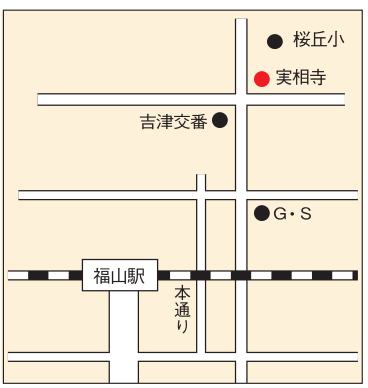
本堂は、桁行19・2m、梁間15mの規模を持つ寄棟造りの建物です。屋根は本瓦葺で、前面には1間の向拝が付き、背面には位牌堂が付属しています。内部には方形の間が6間あります。柱は、祭壇前面のものを除き角柱で、組物は用いられていません。また、祭壇前面の柱筋にある組物も比較的簡素な造りになっています。なお、正面の向拝と、背面の位牌堂は後に設置されたものです。

山門は、桁行4.9m、梁間2.5mの規模で、屋根は本瓦葺です。正面には、飾金具の付いた観音開きの扉があり、片側には脇戸が付属しています。

この門は、本柱が中央線からやや前方にずれて建てられており、いわゆる「薬医門」風となっています。梁の上に飾り板（板蟇股（かえるまた））が置かれているほかは、目だった装飾は施されていませんが、小規模ながら構成材が太く豪壮な造りです。



本堂平面図



寺伝では、元は神辺城の城門で、一時、阿部家の家老内藤角右衛門の邸門となり、その後この寺に移築したものといわれています。多少の変更は見られますが、古材が多く残っており、江戸時代初期の趣がみられます。

このほか境内には、宝永7年（1710年）、城下神島町の富豪であった隅屋才次郎が、娘の病死を悲しんで建立したといわれる題目堂があります。

（1999年4月号に掲載）

笠岡街道
道標が残る笠岡への道

寺町筋の西端、御船町の三角地に「左九州道」「右上方道」と刻まれた道標が立っています。位置は少し動いていますが、城下から笠岡へ至る分岐点でした。

そこから、寺町筋をまっすぐ東進すると三枚橋を渡ります。かつては太鼓形の土橋でしたが、1922年（大正11年）に佐藤吉助が私費を投じて平らな石橋に造り替えたため、通行が便利になりました。その業績をたたえ顕彰碑が建てられています。現在の橋は、1988年（昭和63年）に架け替えられましたが、元の橋の一部が保存されています。

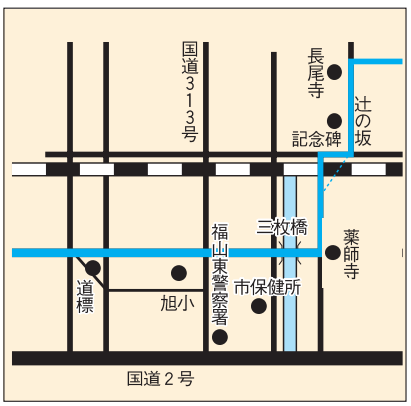
三枚橋。手前に元の橋の一部と道標があります

その側に「右てしろみち」「左かさをかみち」と刻まれた道標が置かれています。元は、さらに東進した薬師寺近くの民家の軒下にころがっていたのを、近年有志の人たちの尽力によって立て替えられました。

笠岡街道は、薬師寺の門前で深津島山の丘陵に突き当たり、左に折れて辻の坂を越えます。辻の坂もかつては人馬も難渋する急峻な坂道で、7・8月には湯茶の接待があったほどでした。それを見かねた村田虎吉によって、明治の終りに切り下げられ、現在のように勾配がゆるくなりました。坂の頂上には、その功績をたたえた記念碑が建っています。傍らの地蔵さんは、この難所の守り仏で、1746年（延享3年）の年号が刻まれています。

長尾寺近くの道標

辻の坂を下り長尾寺の前を通り過ぎると、四つ角に小さな道標があり、「左ふく山」「右かさ岡」と刻まれています。ここで街道は右へ折れて、干拓地の堤防を利用した道が、蔵王病院の麓までまっすぐ東に延びていました。



ここからは、伊勢丘の丘陵の南裾を巡り、引野天神社の前を通って、鋼管の引き込み線の所で現在の国道2号に出て、銀河学園の下から再び幕山台の南の丘陵沿いに笠岡へと通じていました。

御船町の道標には、「右上方道」の下に、小文字で「かさをか三里」と刻んでいます。歴史の道を1日かけて散策してみてはいかがですか。

（1999年7月号に掲載）

神辺街道

道しるべ・橋・惣門（そうもん）

北吉津交差点の北東隅に立っている道しるべを見ると、これより東に進めば京都・大阪に至る道（西国街道〈山陽道〉）に通じ、北に進めば石見国（島根県）に通じる石州（街）道であることが刻まれています。

江戸時代には、福山城下から西国街道が通っていた神辺までの間約5kmの道は、「神辺街道（往還）」と呼ばれた重要な道でした。

神辺の川南で西国街道と分かれたこの道は、まず千田の唐丸坂を越えます。坂の手前には記念碑があり、天明年間（1780年ごろ）以降、何度か坂の改修がなされたことが記されています。坂を越えると、二ツ川から千田の田園地帯を南下します。向東にある丸池の土手には、天保年間（1830年ごろ）に建てられた石灯籠（ろう）があり、ここには街道に面して一里木と呼ばれる松が植えられていたと伝えられています。

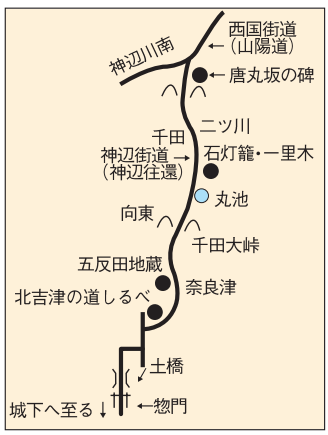
北吉津の道しるべ

これより先は再び山越えです。烏山（うやま）から千田大峠（おおたお）を越えるあたりに、いくつかの石地蔵が目につきます。旅人の安全を祈ったものでしょうか。

峠を下って奈良津の谷を抜けたあたりに、五反田地蔵の休み堂があります。峠を越した旅人の休息の場となったのでしょう。ここから平坦（たん）地を西に進み、最初に紹介した北吉津の道しるべを南に曲がって吉津川の橋（土橋）を渡ると、いよいよ城下に着きます。

この橋は、「備陽六郡志」によると、水野時代（17世紀）には長さ17間（約30m）の土橋でしたが、松平忠雅時代（18世紀初め）に欄干をしつらえた板橋になり、明和4年（1767年）には石橋に換えられたと記されています。城の北側から城下へ入る主要な玄関口として手厚く保護されていました。そして、橋の南詰めには惣門と番所を設け、人や物資の流れを監視していました。

現在の土橋（手前）と向こう側に太鼓橋と惣門



現在、川幅は狭まり岸辺はコンクリートで固められて様相が一変していますが、土橋の東側には街道の面影を再現した太鼓橋（願掛橋）と惣門が建てられています。

（1999年8月号に掲載）

半坂越え
道しるべ・井戸・休み石

徒歩や牛馬を交通手段の中心とした昭和初期まで、福山と熊野方面との往来には、草戸町半坂を越える峠道が利用されていました。

かつて、福山と草戸の集落は、神島橋あたりで二またに分かれた芦田川で分断されていましたが、鷹取橋（現・地吹町荒神社付近）と銭取橋（現・草戸大橋付近）で結ばれていました。

銭取橋の西詰めは、中世の山城である中山城が迫り、その裾を南に歩くと「右やまたさんな道」（山田、山南道）、「左みのみともつ道」（水呑、鞆津道）「東（ハ）海　南ハ田島　北ハ城　川上（ハ）府中　西ハ尾道」、俳句「問ふ人もなき夜半道や閑古鳥　（号）酒楽人　合聲角力」と刻まれた道しるべに出会います。もとは100mほど川上の三差路にあったといいます。

半坂越えのふもとの井戸

中山城南裾の道しるべ

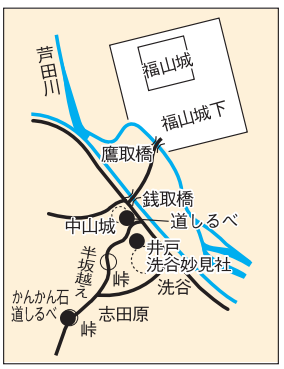
道しるべに従って右の道に入り、草戸の家並みを通り抜け南西に進むと、洗谷妙見社の北側の谷間にさしかかり、いよいよ半坂越えとなるのです。

人馬がやっと通れるほどの急な坂道で、この峠を越えれば瀬戸町志田原です。峠には休み石が置かれ、ひとときの休息場所となっていたと伝えます。

また、半坂への登り口には、今も井戸が残り満々と水をたたえています。

さて、志田原に入るとしばらく緩やかな下りとなりますが、熊野境で再び峠越えとなります。この峠に宝暦13年（1763年）の法界石があります。「かんかん石」として親しまれ、往来する人が安全を祈りました。

小石を投げると「かんかん」と鳴るのでついた名前のかんかん石



また、この石の傍らには、物資の運搬に使われた牛馬の安全を祈願した、文化14年（1817年）の石塔および大正15年（1926年）の道しるべが立っています。

この峠もかつては、狭い急な坂道で、峠には休み石が設けられ、戦前までは根元で4本に分かれた黒松が、往来者を見守っていたそうです。

この半坂越えの道は、福山の町の広がりとともに、利用度が高まっていきましたが、車社会となり、しだいに往来者はなくなり、今では通行不可能となってしまいました。

（1999年9月号に掲載）

手城山城跡

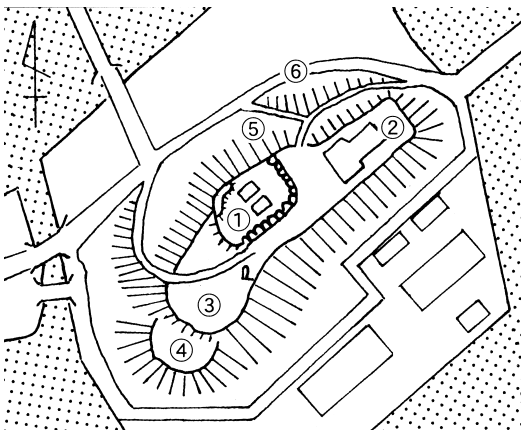
福山湾の見張り所

東手城町にある福山港湾合同庁舎の西側に、手城山城跡（天神山城跡）と呼ばれる戦国時代の城跡があります。江戸時代後期に編纂（へんさん）された『西備名区』には、「この城のある場所は、現在は地続きですが、かつては小さな島で周囲は屏風（びょうぶ）のように切り立ち要害堅固の地である」と記してあります。

ビルに囲まれた手城山城跡

築城年代は不明ですが、天文年間（1532年～1555年）の大内氏による神辺城攻撃のとき、沼隈半島に勢力を広げていた渡辺氏が在陣していたことが知られています。所在場所から考えて、福山湾の出入りを見張る機能を持っていたと思われます。

現在でもここに登ると、中央部最高所に約20m四方の主郭①、その西部分には岩盤を削り出した土塁状の高まりも見られます。北東側の天当神社あたりには別の郭②があり、忠魂碑から南西側にも、参道により切られている郭③があります。さらにその1段下の南端に小さな郭④が見られます。



手城山城跡略図

また天当神社から北西に下る参道⑤がかつての大手道（おおてみち）、そしてこの道を降りたあたり⑥も少し高くなっており、城の一部と考えられています。

この城跡の北方1kmには、同じように島に築かれた梶島山城跡もあります。

（2002年1月号に掲載）

中山城跡

草戸千軒町遺跡を一望

芦田川に架かる草戸大橋を西に渡るとき、正面に見える小山が中世の山城、中山城跡です。

標高47m、平野部からの高さは43mで、『沼隈郡誌』には、「中山城　鳥越の上の山なり」と記されています。

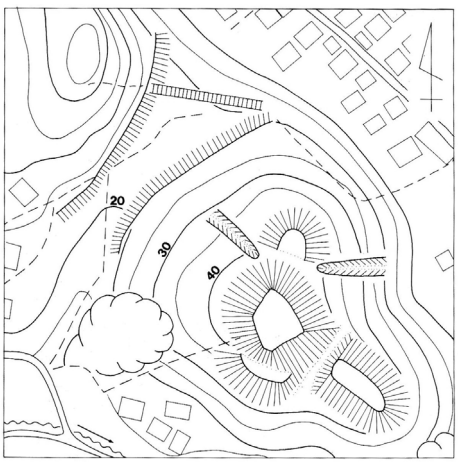
山頂部に約15m×25mの広さの主郭を持ち、南北にも小郭を見ることができます。北側の小郭と主郭の間には東西に竪堀（たてぼり）が築かれています。また、南東下には幅約5mの堀切を設け、その外側に約10m×5mの小郭を3段連続させて配しています。

中央が中山城跡

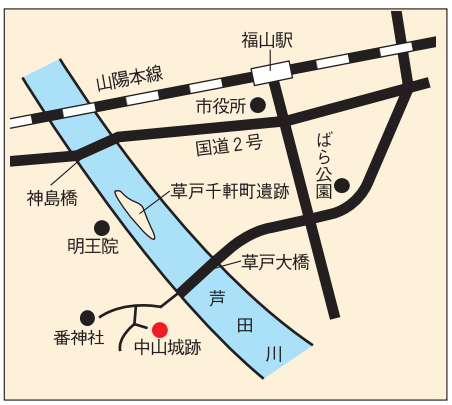
城の北側には、番神社を頂上に祀（まつ）る山があります。この山との間には、幅約2mの道が通っていて、ここも元は城の堀切であったと思われます。

この道の途中にある「長和・草戸新四国八十八ヶ所　十二番　焼山寺」を目印に、その正面にある山道を利用して中山城跡に上がることができます。

城跡からは、北東眼下に、芦田川に埋もれた中世の港町、草戸千軒町遺跡を望むことができます。この辺りは、備後南部に勢力を張った渡辺氏が進出の足がかりとした地で、この城も関連があったと考えられます。



中山城跡略図



瀬戸内海を通じて、国内外との交易があった草戸千軒町や福山湾全体をも見渡すことができた中山城は、経済と交通の重要地点をおさえた城のひとつといえるでしょう。

（２００２年５月号に掲載）

御手洗川沿いの風景①
福山城背の水路網

北本庄の芦田川から取水した水路は、二股と呼ばれる場所で三方に分かれます。一つは東へ流れ吉津・奈良津・蔵王・深津方面の水田を潤す役目を果たしています。この川は、「上井手川」と呼ばれています。この川が木之庄町の時計台の辺りで南へ分かれ、城北中学校の西側を南下して「ドンドン池」と呼ばれる「蓮池」の北端をかすめるように流れています。

福山八幡宮の前を流れる御手洗川

二股から南へ分かれている「下井手川」の東側にもうひとつ、南東へ流れる水路があり、これは「蓮池」へと注いでいます。

江戸時代の初めに、水野勝成が福山城を築城し、城下町を造ったときこの蓮池から福山城の外堀へ水を導き、また城下町の上水道もここから導水しました。いわばこの場所が福山城背風景の原点ともなっているのです。

蓮池から東側には現在3本の水路が流れています。北からの水路は、蓮池の少し北東寄りの場所で水路の立体交差がなされており、南流し蓮池から東へ放流する水路と合流して、「蓮池川」

水路の立体交差

となります。そして、蓮池の北東端のうてびから注ぐ清流はこの水路の上を通って東へ流れ「御手洗川」として、福山八幡宮やその東側へ連なる寺社の門前を緩やかに通って、静謐な風情を醸す都会のなかのひとつのオアシス的な空間を形成しています。

（2008年4月号に掲載）

御手洗川沿いの風景②
福山城背の神社仏閣

備後遺族会館の東にある「赤門」は、かつてはもう少し北側に建てられており、現在の蓮池川沿いにありました。幕末に、福山藩儒の江木鰐水の建議で備後護国神社北側の尾根を掘り切って「胸壁」とした崖面は、蓮池川に面する場所でありました。

蓮池から御手洗川沿いを散策すると、福山八幡宮の白い土塀が続きます。石橋を渡り宮の境内に入ると、鳥居・石段・随身門・拝殿・本殿などが同様な作りをした構造になっています。向って左側が「西の宮」、右が「東の宮」といい、合わせて「両社八幡」と呼びます。

観音寺表門（右）と艮神社参道（左）

西の宮は、もとは若宮八幡といって野上村に鎮座していましたが、水野勝成が福山城築城にあたりこの地に移したもので、武士たちの尊崇を集めました。一方東の宮は、惣堂八幡といわれ福山城下の神島下市にありましたが、寛文年間に水野家臣が騒動を起こしたことと音が通じることを忌み嫌って延広八幡と改称し、城下の町人たちの崇敬する宮となりました。また、境内には水野勝成を祭った「聡敏神社」もあります。

観音寺本堂

福山八幡宮の東には龍興寺があり、福山城築城にあたって移動された常興寺の地蔵堂があります。その東側には、福山城の鬼門である位置に鎮座する艮神社とその別当寺であった観音寺があります。観音寺の表門は切り妻造りの四脚門で、本堂は入母屋造りの向拝付建築で、随所に和様・唐様・天竺様の折衷手法がみられ、桃山時代の建築装飾を引き継ぐ近世初めの寺院建築として大変貴重なものです。ともに県重要文化財に指定されています。

（2008年5月号に掲載）

御手洗川沿いの風景③
福山城鬼門の寺院

極楽橋の北、吉津町北西角は、かつて御手洗川から古吉津町（現在は吉津町）へ上水を取水する大変重要な場所でした。石組みの扉門が遺されており、ここから古吉津町を石畳暗渠で水道を通し、吉津町は土管を敷設して民家や寺院に給水し、法真寺北側の水路へ放水していた旧水道の遺構なのです。

すぐ北側に妙政寺という日蓮宗寺院があります。南無妙法蓮華経の大きな御題目石の後には巨大な仁王門が聳え、さらに奥には山門があり、石垣は福山城にも引けを取らぬほどの巨石を使っています。広大な境内の中央には壮大な本堂が350年の風雪に耐えた雄姿を誇っています。このほかに唐門を備えた御霊屋があり、2代藩主の水野勝俊を祀っています。道路や民家を挟んで北側に広がる墓地には、7人の殉死した家臣の墓を伴った巨大な五輪塔があり、「水野勝俊墓域」として市史跡に指定されています。

妙政寺

御手洗川は妙政寺門前から暫く行くと北に折れ曲がり、また東へと流れを変えます。ちょうどこの角に渡辺神社が祀られていますが、江戸時代には番所が置かれ、城下への出入りを取り締まっていました。

扉門

ここから東に100mほど歩くと真言宗大覚寺派の胎蔵寺があります。水野氏が福山城築城に際して神辺から移築させ、福山城のある山にあった常興寺の釈迦如来坐像を本尊にしたと伝えられています。近年、本尊の胎内からこのことを裏付ける「日本国備後州深津郡椙原保常興禅寺」などの墨書が見つかり、今後、中世史に関する新知見が得られるものと期待されます。

（2008年7月号に掲載）

近代医学と寺地舟里

福山西洋医学の父

福山駅前の三菱東京UFJ銀行南西角の植え込みへ「福山医学黎明の地」と彫られた石碑が建てられています。1869（明治2）年、福山藩は藩士青木勘右衛門の邸宅を買い取り藩立の医学校兼病院を設けました。「同仁館」と名付けられ、近代的医療機関として現在の藤本ビルと銀行のある場所で、西洋医学教育と一般庶民の診療を開始しました。これに尽力したのが、誠之館洋学寮教授であった寺地強平（1809～1875）です。舟里は、強平の号です。寺地が校長と病院長を兼ね、洋方医官8人が36人の生徒に近代西洋医学をここで教えました。

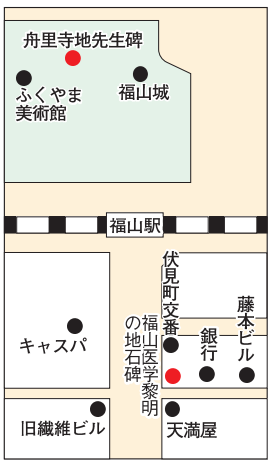
「福山医学黎明の地」石碑

寺地は、はじめ漢方医学を学びましたが、西洋医学を注目するようになり3年間長崎に遊学した後、江戸に上り坪井信道の門に入りました。同門の親友には、「適塾」を開き、明治維新の偉人を多く育てた緒方洪庵がいます。

寺地は福山で医を開業し、家塾においては蘭書を講義しました。彼の医学上での大きな功績は、当時多くの反対を排してはじめて福山地方に種痘を施種したことです。また、阿部正弘の命令で江戸にて蘭書を講じ、関藤藤陰らとともに東蝦夷を踏査して帰り、開拓策を正弘に献じました。彼は、理化学・博物学にも通じており、操練などに関する西洋兵学の翻訳書や福山藩で使用した普通学の教科書『養生論』の著作があります。

寺地舟里の肖像画

同仁館は、福山藩の解体とともに1871（明治4）年に廃止されました。ふくやま美術館北側の先人の森に阪谷朗廬が書いた「舟里寺地先生碑」が建てられており、彼の業績をたたえています。



（2008年8月号に掲載）

小阪山の墓田碑

藩主阿部正方の徳を伝える

幕末、福山藩は徳川譜代大名として多事多端な立場に置かれていました。9代藩主の阿部正方は、1863(文久3)年に朝廷の警護にあたるため京都八幡に上り、翌年4月3日に藩主として初めて福山にお国入りをしました。

1865(慶応元)年には日光警衛に出府しますが、長州藩の攘夷急進派が台頭すると、幕府は福山藩に長州再討の命を下します(幕長戦争)。

小阪山の墓田碑

福山藩は石州口先鋒となり、翌年6月3日に益田へ入り、地元の浜田藩と善戦しますが、7月17日の長州軍総攻撃によりあえなく敗北します。

正方は遠征中に脚気を患い帰城し、翌年の11月22日、福山城内で卒去します。時に20歳でした。正方には後嗣がないため、幕府へは喪を隠して天守閣西北の「小丸山」の竹藪に仮埋葬をします。

明けて正月9日の未明、長州兵が福山城攻撃を開始します。この時、福山藩儒で執政職に就いた関藤藤陰は、「大義滅親論」を唱え藩論を統一したうえで長州との和議を成立させ、福山城下を戦火から救ったのです。

阿部正方の墓所

そして正方の墓は、1869(明治2)年10月になって本庄村小阪山(現在の北本庄二丁目)に改葬され、神道墓の清楚な墓域が造られました。ところが、廃藩置県に伴い阿部家は東京に移住となったため、墓地の管理・祭祀は阿部家旧臣支族たちが、本庄村の田圃一町五反歩を墓田とします。ここから得られる利益をもって永く祭祀の費用に充てることとし、関藤藤陰の撰文になる「小阪山墓田碑」が建てられたのです。

この碑は本庄八幡神社参道上り口に建てられていましたが、現在は本庄交番の北西側、四つ堂の隣に移設してあります。

(2009年1月号に掲載)

桜さく
城跡にある巌谷小波の句碑

「桜さく日本に生れ男かな」小波

1871（明治4）年7月、廃藩置県の詔書が出され福山藩は福山県と改称されました。この大改革により福山城は民間へ払い下げられることになりましたが、天守閣や伏見櫓・筋鉄御門など主要な建物は落札されず遺されました。

城地は、内務卿伊藤博文より「人民

桜さくの句碑

偕楽の地」として公園にするよう示達がなされ、当時の福山町では、本丸に料亭を設けたり、天守閣を有料で見学させたり、東側に通路や石段を付けるなどの整備をしました。

しかし、天守閣の修理費に窮したことから、1897（明治30）年に福山町は「福山公園保存会」を設置し寄付金を募り、その年の春から天守閣・伏見櫓・湯殿・筋鉄御門の大修理に取り掛かりました。こうした地道な努力があって1931（昭和6）年1月19日に天守閣は国宝に指定されたのです。

冒頭の句碑は、月見櫓南下の二の丸に建てられており、桜花満開で賑う福山城を詠んだものです。この句の作者は明治・大正期の児童文学の大家であった巌谷小波です。小波は「日本昔話」、「日本お伽噺」のシリーズを出しました。その中の『桃太郎』や『花咲爺』・『猿蟹合戦』など多くの物語は、彼の手により再生されたもので、児童

巌谷小波

文学の開拓者として業績を残しています。

この句碑がある二の丸一帯は、そこに屋敷を構えていた田中八九郎（福山製紙会社の創業者）が、大正時代に入り桜木を植え始め市内でも有名な桜の名所となりました。

詳しいことは不明ですが、八九郎と小波が交友深かった縁でこの句碑が建てられたものでしょう。

（2009年4月号に掲載）

福山の明治維新

戦火から城下を守った関藤藤陰

時代はまさに薩摩・長州藩をリーダーとする西南雄藩の倒幕運動が大変活発な時でした。譜代であった福山藩は、幕府より二度の長州出役を命じられましたが、軍事力に勝る長州藩に敗北しました。

1868（慶応4）年1月3日の鳥羽伏見の戦いで幕を切った「戊辰戦争」。福山藩をめぐっては5日、朝廷から上京の命を受けた芸州藩は海路から、長州藩は福山藩の向背を窺うべく行動を開始しました。8日夜、今津に宿泊していた長州軍が、翌日福山城を攻撃するとの情報が藩にもたらされます。

藩首脳は発砲を禁じ軽々しい行動を取らないようにしますが、福山城は長州勢に攻め入られます。天守閣は、長州藩大砲隊の一斉射撃を受け数弾が命中したり、歩兵隊に搦め手から攻撃を受けたりしました。小丸山を守備していた福山藩兵は応戦しますが、兵力が圧倒的に劣る福山藩は、なんとか止戦に持ち込もうと考えます。

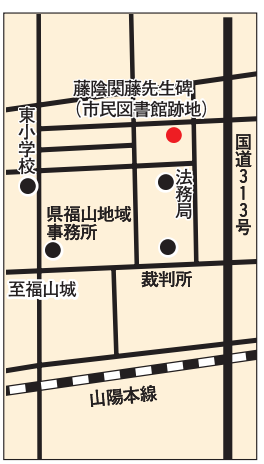
藩主阿部正方を病気で喪っていた藩首脳たちは、関藤藤陰（1807～1876）の主張する「大義滅親論」で藩意をまとめ、藤陰を執政役に就け、長州藩参謀との交渉の任に当らせます。

三吉町にある関藤藤陰の碑

関藤藤陰肖像

この時彼は、平服姿で現れ、身を銃弾にさらして長州軍を説得。屈辱的でない和睦を成功させ、ついに城下を戦火から救いました。

三吉町の市民図書館跡地にある「藤陰関藤先生碑」は、1982年にこうした功績をたたえ建てられました。碑文は盟友だった阪谷朗廬（1822～1881）が書き、「吉備之国第一流ノ人」の文字が刻まれています。



（2009年11月号に掲載）